

小説フレームアームズ・ガール

第2話「グランザム帝国、強襲」

1. やり切れない思い

『我が国の秘密兵器、フレームアームズ・ガール…華々しい初陣！！』

『あのシオン・アルザードを撤退に追い込む大活躍！！』

『我が国の救世主と成り得るか！？』

オルテガ村でのシオンとスティレットの激闘の後の、翌日…どこの新聞記事も一面と社会面において、スティレットの活躍ぶりが大々的に紙面を独占してしまっていた。

また朝のテレビのニュース番組でも、どこの局でもスティレットの話題で持ち切り状態だ。

無理も無い。ルクセリオ公国騎士団のパワードスーツの圧倒的な性能の前に、敗走が続いていたルクセリオ公国軍との戦争において、久しぶりに華々しい勝利を挙げる事が出来たのだから。

記事やニュースではスティレットがシオンを圧倒しただの(実際には互角の死闘だった)、シオン隊が村人を虐殺しようとしたただの(実際には催涙ガスで足止めしただけ)、事実無根のデマまで多数流されてしまっている始末なのだが…。

それでもスティレットがシオン隊を退けたというのは紛れもない真実であり、城下町のみならずグランザム帝国全体が、今回の勝利に熱狂する騒ぎになってしまっていた。

だがそんな熱狂的な騒ぎとは裏腹に…騒ぎの張本人であるスティレットは怒りの形相で、城内で帝国兵の男性の胸倉を掴んで壁に叩き付けていた。

「どうして！？どうしてシルフィさんを殺したの！？どうして彼女を殺す必要があったの！？」

「しよ、少尉殿、おぉおお願いですから落ち着いて下さい～(泣)！！」

「これが落ち着いてられるわけが無いでしょう！？私がオルテガ村に行っている間に、何でこんな事になってしまってるのよ！？」

「ひ、ひいいいいいいい～(泣)！！」

スティレットの凄まじい気迫の前に、帝国兵の男性はただただ怯えるばかりだ。

相手が上官故に反論が出来ないというのもあるが、それ以上に年頃の少女らしからぬスティレットの怒気に完全に気圧されてしまっているのだ。

スティレットは帝国軍がスパイとして仕立てたラクティの、人質に取っていた妹・シルフィの世話役を担当していたのだが…今日の朝になって彼女の朝食を食堂まで取りに行った際、用済みになったシルフィが処刑されたという事を料理長から聞かされ、殺した張本人である彼に対して激怒しているのだ。

敵国の人間とはいえ、どうして無力な一般人を殺す必要があったのか…スティレットはやり切れない思いで一杯だった。

「リーズヴェルト少尉。もうそれ位にしておけ。お前の気持ちは分かるが、ロックウェル軍曹は皇帝陛下からの命令に従っただけの事だ。彼には何の責任も無い。」

「…オラトリオ大尉…！！」

そんなスティレットの、男性の胸倉を激しく掴む両手を優しく右手で包み込んだのは・・・フレームアームズ・ガール部隊隊長、アーキテクト・オラトリオだ。

スティレットとは歳が離れた年長者であり、軍人としても人間としても周囲からの尊敬を集めている、まさにシオン同様にグランザム帝国において英雄呼ばわりされている女性だ。

とても凜とした態度で、アーキテクトはスティレットを見据えている。

スティレットも上官からの命令には逆らえず、渋々ながらも男性の胸倉を離したのだった。

「たたたた大尉殿・・・(泣)！！」

「私の直属の部下の無礼を詫びさせてくれ。軍曹。」

「いえいえいえいえいえいえ、そんな滅相もございませんっ(泣)！！」

「済まなかったな。もうお前は下がってよい。」

「はははははははははいはいはいはいはいはいはいっ(泣)！！」

なんかもう泣きそうな表情で、慌ててその場を走り去っていく男性。

そんな男性の無様な姿を、スティレットはとても苦々しい表情で睨み付けていた。

アーキテクトの言う通り、彼が皇帝からの命令に従っただけだというのは、スティレットとて頭の中では理解している。むしろ逆らってしまうと抗命罪にすら問われかねないのだ。軍人としては彼の行動は至極当然の事だと言えるだろう。

だがそれでもスティレットは納得が行かなかった。まさか皇帝であるヴィクターに反抗的な態度を取る訳にも行かず、やり場の無い怒りを彼にぶつけるしか無かったのだ。

そんなスティレットの様子を、周囲の者たちは怪訝な表情で一斉に見つめていたのだが。

「リーズヴェルト少尉。話がある。ちょっと来い。」

「ちょ、ちょっと、あの、大尉！？」

スティレットの右手を無理矢理引っ張り、アーキテクトはスティレットを無人の部屋へと連れて行く。そして周囲に誰もいない事を確認したアーキテクトは静かに扉を閉めて、スティレットに対して苦言を呈したのだった。

「・・・リーズヴェルト少尉。お前も分かっていると思うが、お前は今やこの国の救世主なのだ。言動と行動にはくれぐれも気を配る事だ。どこにマスコミが潜んでいるか分からんからな。」

「そんな、私は救世主なんかじゃありません！！大体あの新聞の記事だって事実無根ばかり！！私がシオンさんを圧倒したとか書いてあるけど、何も知らないで勝手な事を・・・！！」

マチルダに関しては敵では無かった。記事に書いてあるようにスティレットの圧勝だった。

だがシオンは強かった。はっきり言ってスティレットは殺されるかもしれないと本気で思ったのだ。

何故かシオンが途中で頭痛を訴えて急に撤退したのが気になったのだが・・・それでもあのまま戦っていたら、スティレットとて無事では済まなかっただろう。

それでもそんな事情は、国民には・・・というかマスコミには関係無いのだ。

「事情はどうあれ、お前があのシオン・アルザードを退けたというのは紛れもない事実だ。」

「ですが・・・！！」

「だからこそお前は救世主として扱われているのだ。これまで我が軍がルクセリオ公国を相手に敗走を続けていたのだから、尚更な。」

半年前にパワードスーツを実戦投入したルクセリオ公国騎士団の前に、これまでグランザム帝国軍は敗走を繰り返し、苦境に立たされていた。

そんなルクセリオ公国騎士団の、しかも英雄とまで呼ばれていたシオンさえも退けた…この事実
に国民が熱狂しない訳が無いのだ。

だからこそマスコミも売れる記事を作る為に、記事のネタになるスティレットを放っておく訳が
無い…だから言動と行動には気を付けろと、アーキテクトは苦言を呈しているのだが。

「まあそれはそれとして…先日のお前の戦闘記録を見させて貰ったのだがな。あのマチルダと
かいう新兵を何故殺さなかった？」

「それは…。」

「確かに中々の手練れだったが、それでもお前ならアルザード中尉の妨害が入る前に殺せたはずだ。
なのに何故彼女をみすみすみ見逃すような真似をしたのだ？」

アーキテクトに睨まれたスティレットは、苦虫を噛み締めたような表情でうつむいてしまう。
先程の兵士の胸倉を掴んだ迫力が、今の彼女からは全く感じられなかった。

「…相手は最早丸腰でした。無抵抗の相手を殺すのは良くないと私は思いました。」

「彼女が何か武器を隠し持っていた可能性も否定出来いよな？」

「そ、それは…」

「それにアルザード中尉との交戦中に、何故お前は忍ばせていた伏兵を展開させなかった？あ
の状況ならまさに絶好の好機だったはずだ。」

「それは村の人たちを巻き込みたくなかったから…。」

「既に戦場は村の敷地外だった。」

「……。」

スティレットの言い訳を情け容赦なく次々と潰したアーキテクトは、すっかり落ち込んでしまったス
ティレットを見て、深く溜め息をついたのだった。

スティレットは、確かにグランザム帝国軍の中で最強の戦闘能力を誇る。

剣の腕は帝国軍最強、体術や銃火器の扱いも高いレベルにある。訓練での模擬戦でも一度も
負けた事が無い程だ。

そんなスティレットだからこそ、彼女用にカスタマイズされた最新鋭のフレームアームを与えられ
たのだが…スティレットには軍人として致命的過ぎる弱点がある。それが今回の作戦において完
全に露呈される結果となってしまった。

それはスティレットが、あまりにも優し過ぎる…人を殺せないという事だ。

マチルダをわざと殺さなかったり、撤退するシオンを追撃しなかったり、忍ばせていた伏兵を最
後まで展開させなかったり。

シオンはともかくマチルダに関しては、殺す機会なんて幾らでもあったのに、それでもスティレット
はマチルダを最後まで殺そうとしなかったのだ。軍人としては失格だと言わざるを得ない。

「リーズヴェルト少尉。お前は5年前、この戦争で両親を失ったそうだな。何故かその時の記憶が
曖昧になっていて、路頭に迷っていた所を皇帝陛下に保護されたという事も聞いている。」

「…はい。」

「そしてお前は自ら皇帝陛下に志願し、士官学校で訓練を受け軍人となった…自分のような犠
牲者を二度と出さないように、自分自身の手で人々を守りたいと。」

「…はい。」

「だが敵を討たねば、こちらが討たれる…お前の言う大切な人たちを到底守り切る事は出来な
いぞ。」

こんな年頃の少女に敵を殺せなどと命じるのは、アーキテクトとて抵抗があるが・・・それでもそうさせなければ、いずれスティレット自身も戦火の中で命を落とす事になるだろう。

敵を討たねば、その敵は新たな武器を手にも再び戦場に舞い戻る・・・だからこそ潰せる時に潰しておかないといけないのだ。

今回むざむざと逃がしたマチルダにしても、次に戦場で出会った時はさらに手強い相手になっているかもしれない。そしてマチルダの手によって同胞が殺される事にもなりかねないのだ。

アーキテクトはスティレットを怒鳴り散らしたりはしないが、それでもその言葉の1つ1つには無数の修羅場を潜り抜けてきた者としての重みと、スティレットに対しての愛情も込められていた。

それを分かっているからこそ、スティレットもアーキテクトに何も言い返せないでいるのだが。

「隊長、ステラが敵を殺せないなら、私と迅雷をサポートしてくれるだけでも充分ですよ。」

「そうそう。ステラの援護があるだけで、私もお姉ちゃんも安心して戦えますから。」

そこへ2人の少女が部屋の中に入ってきた。

フレームアームズ・ガール部隊に所属する双子の姉妹の、姉の李轟雷(リ・ゴウライ)と妹の李迅雷(リ・ジンライ)だ。

元々は隣国のチャイナ王国出身なのだが、王族同士による権力争いに巻き込まれて両親を殺され、グランザム帝国に亡命したという経歴を持つ少女たちだ。

同じ年頃、そして同じような境遇の持ち主という事で、スティレットはこの2人とすぐに仲良くなったのだが。

「・・・轟雷少尉、それと迅雷少尉か。私たちの話を聞いていたのか。」

「さっきステラに声を掛けようとしたら、隊長がステラを拉致したのが見えちゃったんで。」

「拉致とは心外だな轟雷少尉。それで私たちの会話を盗み聞きか。」

「敵を殺すのは私と迅雷に任せておけばいいんですよ。ステラにまで無理に殺しをさせる必要は無い・・・だってステラは私たちと違って優しい子ですから。」

「その優しさが戦場では命取りになる事だってあるんだ。それはお前たちが一番良く分かっているはずだろう。醜い権力争いに巻き込まれて両親を失ったお前たちならな。」

「・・・分かっているからこそ・・・ステラにまで殺しをして欲しくないんですよ。」

皮肉を込めた笑みを浮かべながら、轟雷は自らの両手を見つめたのだった。

故郷のチャイナ王国で迅雷と共に、生き残る為は何人も人を殺してきた・・・この血で染まってしまった自らの手を。

刃物で人を刺した時の肉の感触、生々しい血の匂い、どんどん冷たくなっていく体温・・・轟雷も迅雷も、それを嫌という程味わってきた。アーキテクトに救われなければ、今頃この2人の心は壊れてしまっているもおかしくなかったかもしれない。

だからこそ轟雷も迅雷も、スティレットにまでそんな苦しみを味合わせたくないのだ。

スティレットにはいつまでも、自分たちの心を癒してくれる優しい少女でいて欲しいから。

「・・・轟雷少尉。お前の言いたい事は分かった。だが戦場はそんなに甘くは・・・」

言いかけた所で、アーキテクトのスマートフォンの着信音が鳴り響いた。

「・・・私だ。どうした？」

『オラトリオ大尉、皇帝陛下がお呼びです。至急王室に来て下さい。今回のルクセリオ公国強襲作戦について、大尉に話があるとの事です。』

「了解した。すぐに行く」と皇帝陛下に伝えておいてくれ。」

『はっ。』

着信を切ったアーキテクトはスマートフォンを懐にしまい、部屋の扉を開けたのだった。

「呼び出しを食らってしまったな。済まないがこの話はまた今度だ。」

「あの、オラトリオ大尉……。」

「どうぞお前たち3人を、今度の作戦で使う目途が立ったとかいう話なのだろう。とにかく私は皇帝陛下の元に向かう。お前たちはいつも通り訓練に励んでおけ。」

「……了解しました。」

「……私がないからと言って、サボるなよ？」

敬礼するステイレットたちに穏やかな笑みを見せながら、アーキテクトは急ぎ足でその場を後にしたのだった……。

2. マチルダとの夕食

翌日の夜……今日の訓練と任務を全て終えたシオンは、マチルダを連れて近くのファミレスに夕食を食べに来ていた。

マチルダのシオン隊への入隊祝いとして、シオンの奢りで夕食を振る舞う事になったのだ。

本来ならシオンが借りているアパートの部屋に連れて行って、シオンの手作りの料理を振る舞っても良かったのだが……というかオスカルやリックといった、他の男性隊員たちの入隊祝いの時は実際そうしたのだが。

それでも女性であるマチルダを2人きりで部屋に連れ込む所をマスコミに見られよう物なら、新聞や週刊誌の記事にある事ない事を書かれてしまい、マチルダや彼女の家族に迷惑をかける事にもなりかねない。だからこうしてファミレスで夕食を奢るという形になったのだ。

「今日は僕の奢りだから、遠慮せずに好きな物を頼んでいいよ。マチルダ。」

「じゃあ遠慮なくご馳走になりますね。シオン隊長。」

屈託の無い笑顔をシオンに見せたマチルダの元に、女子高生のバイトらしき少女がオーダーを聞きにやってきた。

シオンは好きな物を頼んでいいとは言ったが、それでもあまりに高価なメニューを頼むのは気が引けるという物だ。

それにシオンがそういう細かい事を気にしないタイプなのはマチルダも理解しているが、社会人としての節度、基本的な一般常識や礼儀作法、テーブルマナーという物もある。

なのでマチルダは高過ぎず安過ぎず、手ごろな価格のメニューを注文する事にした。

「すみません、この麦飯とろろ御膳をお願い出来ますか？」

「じゃあ僕は和風ハンバーグのAセットで。」

「かしこまりました。しばらくお待ちくださいませ。」

少女がタブレットに注文を入力すると、オンラインで繋がれた厨房のパソコンに、自動的に注文が入力されていく。

これにより口頭での注文伝達ミスを防ぐ事が出来るし、無駄な時間を省く事で仕事の効率を高め

る事が出来るという訳だ。

シオンは基本的に自炊するので、こういった飲食店には月に数回しか行かないのだが、本当にハイテクな世の中になった物だと心の底から関心していた。

そしてシオンは『ルクセリオの英雄』と呼ばれているだけあって、ルクセリオ公国ではとても高い知名度を誇る。それに彼の人柄の良さや飾らない性格もあって、国民からの人気も高い。

それ故にシオンの姿を見かけた客の女子高生たちが、キャーキャー言いながらシオンにサインをねだったり、握手や記念撮影をお願いしたりしてきた。

苦笑いしながらそれに応えるシオンの姿を見て、本当にこの人はこの国の英雄なんだと、マチルダは改めて思い知らされる事になった。

「・・・それでマチルダ。今日で入隊して3日目になるけど、訓練や任務にはもう慣れたかい？」

「はい。でも私などまだまだ若輩者ですから。」

「そんな事は無いさ。今日の訓練の模擬戦でも大活躍だったじゃないか。」

「いえ、そんな・・・。」

提供された食事を食べながらシオンとマチルダは、他愛無い雑談をしつつも笑顔を見せる。謙遜するマチルダだったが、実際にシオンの言う通り、今日の模擬戦では新人らしからぬ大活躍を見せたのだ。

曲がりなりにも、士官学校をトップの成績で卒業しただけの事はある・・・先日の実戦でステイレットに敗れはしたものの、それを差し引いたとしても本当に充分過ぎる程の新戦力が加入した物だ。シオンは心の底からそう思ったのだった。

シオンに褒められたマチルダはとても嬉しそうな表情で、とろろをたっぷりかけたご飯を美味しく口に運ぶ。

大和芋のネバネバと、麦飯のさっぱりとした風味が絶妙にマッチし、マチルダの口の中で絶妙なハーモニーを奏でる。

こういったネバネバした食べ物は苦手だと語るシオンに対し、軍人なんだから好き嫌いは駄目ですよと、笑顔で他愛無い会話をするマチルダだったのだが。

「・・・はあ・・・。」

だが食事を終えたシオンはチラリと窓の方を見て、とてもウザそうに溜め息を漏らしたのだった。それを見たマチルダはいきなりどうしたのかと、怪訝そうな表情を見せる。

「シオン隊長、一体どうなされたのですか？」

「さっきから窓側から僕への強烈な視線を感じたから、気になっていたんだけどさ。」

「そんな、シオン隊長は有名人なんですから、ここにいる方たちの注目を集めたとしても仕方が無いのでは？」

「いや、それもあるんだけど・・・あその席に座ってる彼女は多分マスコミだよ。」

「マ、マスコミ！？」

驚くマチルダだったが、確かに窓側の席に座っているスーツ姿の若い女性が、先程から食事をしながら不自然な視線をシオンたちに送っていた。

それに不自然に中途半端に開けた鞆の中身を、何故かシオンたちの方に向けている・・・中に隠しカメラを仕込んであるのがバレバレだ。

確かにシオンは『ルクセリオの英雄』と呼ばれている程の有名人だ。だからこそシオンのスキャン

ダルでも暴いて記事にしてやろうかと考えているのだろうが。

「あの様子だと、恐らく集音マイクも仕込んであるんだろうな。」

「た、大変ですね。シオン隊長……。」

「これもいつもの事だから慣れてるんだけどさ。君には悪いけど、僕への言動にはくれぐれも気を配ってくれないか？」

「りよ、了解しました……。」

「まあ普通に話す程度なら、別に問題無いとは思うよ。」

シオンはこれも有名税のような物なのだとは完全に割り切っているし、自分が何を書かれようが特に気にもしていないのだが、それでもマチルダや彼女の家族にまで迷惑を掛けるわけにはいかないのだ。

何ともやり切れない気持ちになったシオンは、テーブルに据え付けられた呼び出しベルを鳴らして従業員を呼んだのだった。

「……お客様、追加のご注文でしょうか？」

「はい、バーボンをロックでお願いします。」

「かしこまりました。」

笑顔で席を去るバイトの少女だったのだが、マチルダは驚きを隠せないでいた。

「シオン隊長、お酒飲まれるんですか！？」

「明日は仕事が休みだからね。さすがにオスカルのようにガブ飲みはしないけどさ。あくまでも嗜(たしな)む程度だよ。」

「ちょっと意外です……隊長からはそんなイメージが全然沸かないので……。」

「ははは、よく言われるよ……だけど僕にだって酒に縋(すが)りたくなる時もあるんだよ。」

バイトの少女に差し出されたウイスキーと氷が入ったグラスを、シオンはゆっくりと口に含んだ。ウイスキー特有の苦みと強いアルコールが、シオンの喉を刺激する。

「……ルクセリオの英雄か……皆は僕の事をそう呼んでくれるんだけど……僕にはたまにそれが重荷になる事もあるんだ。」

酒が入ったからなのか、シオンは突然マチルダに愚痴をこぼし始めたのだった。

マチルダはただ黙って、シオンの愚痴に耳を傾けている。

酒に縋りたくなる時もある……シオンだって1人の人間なのだ。中尉として、シオン隊という小隊を預かる隊長として、周囲からの期待を重圧に感じる事だってあるのだろう。

普段のシオンは、そんな弱みを周囲には全く見せないのだが……それでもせめてこういうプライベートな時間では、自分には気兼ねなく弱みを見せて欲しいと、マチルダは心の底からそう思う。

気兼ねなく弱みを見せられる相手が1人でもいないと、シオンだって心が休まらないだろう。マチルダはシオンにとって、そんな存在でありたいのだ。

「だって僕は、何よりも守りたかった大切な人を、守る事が出来なかったから……。」

「……。」

「僕にはアルテナという妻がいたんだけど……1年前に娘の出産の為に、近隣の村の病院で静養させていたんだ。だけど突然帝国軍が襲撃してきて、村が帝国軍の爆撃に巻き込まれて……アルテナも、産まれたばかりのセリスも死んでしまった。」

その件に関してはマチルダも、任官式の時にジークハルトから聞かされていた。
そしてジークハルトから頼まれたのだ。シオンを支えてやって欲しいと。シオンの事を頼むと。

「当時僕はまだ少尉で、アルフレッド隊の隊員だった。そして僕たちは村の防衛任務から外され、城下町の防衛を任されたんだ。僕が私情に流されるといけないからという理由でね。」

「……。」

「今思えば村への爆撃は、城下町の守りを手薄にさせるための陽動だったんだろう……僕は隊長に命じられるまま、迫りくる帝国軍の本隊から城下町を何とか守り切ったけど……村の防衛を任されていたミカエル隊は敵を全滅させる事に拘り過ぎて、村人の避難誘導を疎かにしてしまった。」

「……。」

「その結果が、村人の大量虐殺……村を襲った帝国軍は全滅したけど、ミカエル隊も死傷者を何人も出して、隊長だったミカエル中尉も戦死して……駆けつけた僕も生き残った村人たちから酷い罵声を浴びせられたよ。」

過ぎ去ってしまった時は、もう戻らない。どうあがいても妻も娘も生き返らない。

それでもシオンは思うのだ。もしあの時、自分が村の防衛を任されていたら……と。

あの時こうしていれば良かったのでは……もっと上手くやれる方法があったのでは……こういう仕事をしていると、シオンは本当に後悔ばかりだ。

それでも後悔を引きずってばかりもいられない。後悔という経験を次に活かさないといけない。

今のシオンは中尉として、シオン隊の皆の命を預かる隊長という立場にあるのだから。

そんな決意を改めて胸に抱いたシオンだったのだが……突然マチルダが店員を呼んだ。

「すみません、ビールをグラスで一杯お願いします。」

「はい、かしこまりました。」

「……って、マチルダ、無理して僕に付き合わなくてもいいんだぞ？」

「いえ、私にも付き合わせて下さい。シオン隊長が背負っている苦しみを、少しでも和らげたいから……それにシオン隊長ばかり私に愚痴ってばかりです。今から私の愚痴にも付き合ってくださいませんか？」

とても意地悪そうな笑みを浮かべながら、マチルダはシオンにそう告げたのだった。

確かにルクセリオ公国では、18歳になった時点で成人だと認められる。

ナナミの生まれ故郷であるジャパネス王国のように、20歳にならないと飲酒が出来ないような国もあるのだが、この国では18歳で飲酒が認められるのだ。

マチルダは先月18歳になったばかりだし、まあ明日は休みだし、ビール1杯くらいなら大丈夫だろう……多分……シオンはそんな事を考えていたのだが。

「……苦い。」

差し出されたグラスを口に含んだマチルダは、正直な感想をシオンに漏らしたのだった。

「こんなに苦い飲み物を、どうしてオスカル少尉はあんなに美味しそうにガブ飲み出来るんでしょうかね……？」

「……君にもいずれ、分かる時が来るさ。」

苦笑いしながらマチルダにそう呟いたシオンは、何気なく鞆からタブレットを取り出したのだった。画面に映し出されたのは、先日のオルテガ村での戦闘記録……シオンとスティレットが上空で

ビームサーベルをぶつけ合っている画像データだ。

「それにしても彼女…リーズヴェルト少尉と言ったかな…なんか気になるんだよな。」

「……。」

「何故か彼女と剣を交える内に、妙に懐かしい気持ちになったんだけど…僕は彼女とは初対面のはずなのに…いや…初対面…なんだよな…？」

「……。」

「君にも指摘されたんだけど、何故僕は彼女の事をステラなんて呼ん…で…？」

言いかけたシオンだったが、その時だ。

「…ひっく。」

マチルダが物凄く座った目で、シオンの事を睨み付けていたのだった…。

いきなりの出来事に、シオンは思わずタジタジになってしまう。

「…あの…マチルダ…さん(汗)？」

「シオン隊長~~~~、さっきから目の前の私を無視して~~~~何で彼女の話ばかり~~~~
~するんですか~~~~!!?失礼じゃないですか~~~~!!?」

「あの、いや、それは…その…(汗)。」

マチルダは、べろんべろんに酔っばらっていた…。

まさかそんな、ビールを一口飲んだだけで!?予想外の事態に戸惑いを隠せないシオンだったが、なんか窓側の席にいるマスコミの女性が物凄い笑顔でこちらを見つめていた。

それを見たシオンは、物凄く焦った表情になったのだが…。

(やばいやばいやばい、こんな所を記事にでもされたら~~~~!!)

「シオン隊長~~~~!!…こら~~~~っ!!シオン~~~~!!」

「はいはいはいはいはいはいはいはい(汗)!!?」

シオン=中尉。

マチルダ=上等兵。

「何で私と会話してる時に、あの女の人の方を見てるのよお~~~~っ!!?」

「いや、その、だから彼女はマスコミ…(泣)。」

「ちゃんと私の目を見て話さないよ~~~~っ!!ヘタレなの貴方は~~~~っ!!?」

「あ、あの…(泣)。」

「大体シオンもさあ~、もう24歳なんだからあ~、いい大人なんだからあ~、いい加減新しい奥さんを見つけてえ、身を固めるべきなんじゃないかと私は思うんだけど~っ!!」

「う…うん…それは陛下からも散々口煩く言われてるんだけどね…(泣)。」

すっかりべろんべろんに酔っばらってしまったマチルダは目に涙を浮かべながら、公衆の面前でとんでもない事を口走ってしまったのだった。

「だったら私がシオンの新しいお嫁さんになってあげるわよっ!!」

「…はああああああああああああああ(泣)!!?」

突然の爆弾発言に周囲の客たちは一斉に騒ぎ出し、中には携帯電話やスマートフォンを取り出し、ツイッターや2ちゃんねるで実況する者たちまで現れる始末だ。

マスコミの女性も最早コソコソと隠れる事さえもせず、物凄い笑顔で堂々とボイスレコーダーをシオンたちに向けていたのだった…。

「私がアルテナさんの代わりになってあげるわよ！！そうすればシオンも寂しくないでしょ！？」

「あ、あの…(泣)。」

「子供は何人欲しい！？でも子供を作るならシオンが今借りてる部屋じゃ手狭だから、もっと広い部屋を借りるか、思い切って一軒家でも建てる！？今のシオンの年収なら楽勝でしょ！？」

「そ、その…(泣)。」

「私じゃ…私じゃアルテナさんの代わりとして物足りないかもしれないけど…貴方を精一杯愛してあげるからあ！！うわああああああああああああん(泣)！！」

散々シオンに対して泣き喚いた挙句、泣きながら机に突っ伏したマチルダは…そのまま静かな寝息を立ててしまったのだった…。

「…寝たあああああああああああああ(泣)！？」

「…すー…すー…うーん…シオン…。」

「どどどどどどどどどどうしよう…(泣)。」

このままマチルダを自分のアパートの部屋や、マチルダが住んでいる軍の女子寮に連れて行った所で、シオンがマチルダの寝込みを襲ったとか、事実無根の変な記事を書かれてしまうだけだ。まあ今の時点で、もう既に変な記事を書かれてしまうだけの状況になってしまっているのだが。

「…うーん…こうなったら…仕方が無いな。」

仕方が無いのでシオンは、マチルダを彼女の実家に連れて行く事にしたのだった。

これなら何かあってもマチルダの家族が証人になってくれるだろうし、元々いずれ挨拶しに行く予定だったし、丁度いい。

清算を済ませたシオンは、たまたま近くを通りかかったタクシーを呼び、すっかり眠ってしまったマチルダと一緒にタクシーに乗り込んだのだった。

3. 実家での騒動

シオンとマチルダを乗せたタクシーが城下町の正門を抜けて、すぐ近くにあるサファテ村へと向かっていく。

マチルダの実家はこのサファテ村にポツンと存在する、のどかな一軒家だ。

マチルダの話だと父親が専業農家なのだそうで、敷地内には野菜がたわわに実ったビニールハウスや畑が数多く存在していた。

数多くの建物がひしめき合う都会の城下町とは一転して、このサファテ村はとても静かで平和そうな村だ。

そしてシオンたちルクセリオ公国騎士団が日夜頑張っているからこそ、この村の平和も守られているのだ。

ピンポーン。

すっかり寝込んでしまったマチルダを背中に背負いながら、シオンはマチルダの実家の呼び出しベルを鳴らす。

それからしばらくして慌ただしい足音と共に、玄関の扉が勢いよく開け放たれた。

「は〜い、どちら様・・・って、あらあらあら！？」

玄関を開けたマチルダの母親が、苦笑いをするシオンと彼におんぶされているマチルダを見て、とても驚いた表情を見せる。

「あの、こんな夜分に突然申し訳ありません。娘さんの上官のシオン・アルザードという者なのですが・・・。」

「シオンさん！？あらあらまあまあ、いつも娘が大変お世話になっております！！」

「それですね、実は・・・。」

事情を聞いたマチルダの母親が、快くシオンを家の中に迎え入れたのだった。

「ああもう、本当に娘がご迷惑をお掛けしてしまっでごめんなさいね！！さあさあ、遠慮せずに入って頂戴！！」

「は、はい、失礼します・・・。」

なんか先程のマスコミが、物凄い笑顔で物陰からカメラを回していた。本人は隠れてるつもりなのだろうが、シオンには完全にバレバレだ。

(ま、まだ追いかけてきてる・・・いい加減しっこ過ぎるだろ・・・。)

「あんた、シオンさん！！シオン・アルザードさんが来たわよ！！」

「何い！？お前の命を救ったっていう、あの坊主がか！？一体こんな時間に何の用件だ！？」

「ビールを一口飲んで酔っぱらっちゃったマチルダを、ここに連れてきてくれたの！！」

「はあ！？ビール一口で酔っぱらっただあ！？何だあいつも情けねえ女だなあ！！まあいい、とにかくシオンをここに連れて来い！！」

取り敢えずマチルダを応接室のソファに寝かせたシオンは、マチルダの母親に呼ばれて居間にやってきたのだった。

居間にいたのは、いかにもサバサバした雰囲気、ビールを飲んでいるマチルダの父親。

「おう坊主。イメルダから聞いたぞ。娘が粗相して迷惑かけちまったようだな。」

「い、いえ、そんな・・・。」

「まあそんな所にいつまでも突っ立ってないで、そこに座れや。」

「は、はい、失礼します・・・。」

何でだろう。別に悪いことは何もしてないのに、シオンはなんか凄くいたたまれない気持ちになってしまったのだった。

用意された座布団の上に、正座しようとしたシオンだったが。

「何でえ何でえ、お前キンタマついてんのか？男のくせに正座なんかしてんじゃねえよ。」

「す、すいません・・・。」

何故か怒られたシオンは正座を解いたのだった。

「自己紹介がまだだったな。俺はマチルダの父親のガイウス・アレン。こいつは俺の妻のイメルダ・アレンだ。」

「僕はルクセリオ公国騎士団シオン隊隊長、シオン・アルザード中尉です。」

「お前にはマチルダが世話になってるし、俺の妻の命を救ってくれた恩義もある。歓迎してやるから、これから暇な時はいつでも遊びに来いや。」

「は、はぁ・・・。」

「それにしてもお前、軍人のくせに線が細えなあ。ちゃんと飯食ってんのか？」

ガイウスはまるでシオンの事を物色するかのように、ジロジロと睨み付けている。

その鋭い視線に、思わずタジタジになってしまったシオンだったのだが。

成る程、確かに線は細いが筋肉の質は良い。曲がりなりにも軍人なだけの事はある。

それに見た目はヘタレそうな優男だが、何気ない動作の1つ1つにも全く隙が無い。

ガイウスは苦笑いをするシオンの身体を見て、思わず感心したのだった。

「何何？お父さん一体何の騒ぎなの・・・って、ああああああ！！」

「おうミハル。お前も知ってるだろ。こいつがマチルダの上官のシオン・アルザードだ。」

「シオンさん！？嘘！？何でうちに来てるの！？」

「ビールを一口飲んだだけで酔っ払っちゃまったマチルダを、ここに連れて来てくれたんだよ。」

シオンの事を興味深そうに見つめているのは、とても元気一杯の年頃の少女だ。

「私、ミハル・アレンって言います。お姉ちゃんがいつもお世話になってます。」

「ああ、君がマチルダの妹さんなのか。君の事はマチルダから聞いているよ。」

「城下町の女子高に通ってる高校1年生です。これからよろしくお願いしますね、シオンさん。」

ミハルはニヤニヤしながらシオンの隣に座り、ジロジロとシオンの事を見つめている。

いきなりのミハルの行動に、シオンは戸惑いを隠せないでいた。

そんなシオンにイメルダが玄米茶を差し出してくれたのだが、ミハルが物色するかのようにシオンの事を見つめ続けるもんだから、とても落ち着いて飲めやしない。

玄米茶の香ばしい香りが、シオンの口の中を包み込んだのだが・・・今のシオンにはそれを味わうだけの余裕が全然無かった。

「・・・うーん・・・私・・・今まで一体何を・・・」

そんな居間でのシオンたちの騒ぎで目を覚ましたのか、ソファの上で寝かされていたマチルダが、何が何だか分からないといった表情で起き上がったのだった。

何というか、頭の中がズキズキする。ビールを一口飲んでからの記憶が全然無い。

今の自分が置かれている状況を、マチルダはしばらく理解出来ていなかったのだが。

「・・・何で！？何で私、実家にいるの！？」

見覚えのある周囲の景色に、マチルダは思わず仰天して立ち上がったのだった。

慌てて居間にやってきたマチルダが目撃したのは、すっかりミハルに懐かれてしまったシオンの姿だった。

苦笑いするシオンの左腕を両腕でしっかりと抱き締め、身体を密着させて離さない。

何というか、ミハルの豊満な胸がシオンの左腕に当たっていた。

「ちょっとミハル、貴方一体シオン隊長に何やってんのよ!？」

「あ、お姉ちゃんやっとなんて起きた。」

「いや、て言うか、何でシオン隊長がここにいるんですか!？」

シオンに事情を説明されたマチルダは、とても申し訳なさそうに深々と頭を下げたのだった…。

「シオン隊長、本当に申し訳ありませんでした!!私を介抱して頂いただけでなく、まさか実家にまで連れて行って下さったなんて…!!」

「いやいやいやマチルダ、そんなに頭を下げなくてもいいから!!」

「それで私、シオン隊長に何か失礼な事を言いませんでした!？」

「べべべべべべべべ別に何も言ってないよ(汗)!？」

「…言ったんですね!？私、シオン隊長に何かとんでもない事を言ってしまったんですね!？あれだけシオン隊長に言動に気を付けろって言われてたのに、私ったら…!!」

マチルダにはビールを一口飲んでからの記憶が全く無いのだが、シオンの慌てふためいた態度を見る限り、何かとんでもない事を口走ってしまった事だけは確かなようだ。

顔を赤らめたマチルダは、とても恥ずかしそうに両手で顔を押しさえたのだった。

シオンもシオンで、マチルダがあその時の事を覚えていなかった事で内心ホッとしたのだが。

(あ～、でも近い内に週刊誌で記事にされるんだろうなあ…その時はどうしよう…。)

本当に困り果ててしまったシオンなのだった。

「…シオン。マチルダ。もう夜遅いから、お前らは今日はここに泊まってけ。」

「お、お父さん、いきなり何を言い出すのよ!？」

「何言ってやがる。お前ら明日は休みだってシオンが言ってたから、別にいいだろ。」

「そ、それはそうなんだけど…。」

まさか実家とはいえ、シオン隊長と一つ屋根の下で寝泊まりを…!?それを考えるとマチルダは急に恥ずかしくなったのだが、ミハルがとても嬉しそうにシオンの首に両手を回したのだった。

「やったあ!!ねえシオンさん、私と一緒に寝よ!？」

「ミハルあんた、何馬鹿な事考えてるのよ!？」

「だって部屋が空いてないんだもん。だったら別にいいじゃない。」

「大体シオン隊長だって困ってるでしょ!？いい加減シオン隊長から離れなさいよおっ!!」

「え～?シオンさん、全然困ってるように見えないんだけど～?」

「少しは嫌がって下さいシオン隊長—————(激怒)!!」

何故かシオンはマチルダに怒られたのだった。

ただマチルダを実家に連れてきただけなのに、一体全体どうしてこうなった…シオンはもう苦笑いするしかなかった。

「ぼ、僕はそこのソファで寝させて貰うよ。それなら…。」

「何言ってるんですか!？軍人なんですから体調管理をしっかりしないと駄目ですよ!!ソファで寝るなんて絶対駄目です!!」

「そ、それはそうなんだけど…。」

「だったらシオン隊長は私の部屋のベッドで寝て下さい!!ミハルは私と一緒にベッドで寝るの

よ！？いいわね！？」

マチルダにそう告げられたミハルはシオンから離れて、何故かいきなりマチルダに抱き着いた。いきなりの出来事に戸惑いを隠せないマチルダだったのだが…次の瞬間ミハルはニヤニヤしながら、とんでもない事を口走ったのだった。

「え？何何？お姉ちゃん、私とエッチしたいの？レズプレイしたいの？」

「はあああああああ！？何考えてるのよあんたは！？そんな訳無いでしょ！？」

「え～？だってお姉ちゃん、私と一緒にベッドで寝るって言ったじゃん。」

「それは部屋が足りないから、私とあんたと一緒にベッドで寝た方がいいんじゃないのっていう話をしただけあって、そもそも何で私があんたとそんな事を…っ！？」

顔を赤らめたシオンを見て、マチルダは物凄く恥ずかしくなってしまったのだった…。

「ミハルの言う事を本気にしないで下さいよ！！シオン隊長—————（激怒）！！」

4. グランザム帝国軍、強襲

そして遂にグランザム帝国軍による、ルクセリオ公国城下町侵攻作戦が開始された。

無数の輸送艦、戦闘機、戦車、モビルアーマー、歩兵といった数多くの戦力が、左右から挟撃を仕掛けるかのような陣形を維持し、ルクセリオ公国の城下町の前で待機している。

もうこれで、この城下町にどれだけの数の侵攻作戦を仕掛けたのだろうか…最早兵士たちの誰もが数え切れていない程なのだが、その度にルクセリオ公国騎士団の…特にシオンの大活躍によって退けられてきたのだ。

半年前にルクセリオ公国騎士団が実戦投入してきたパワードスーツ…その圧倒的な性能の前に、これまでグランザム帝国軍は何度も敗走を繰り返してきた。

だがそれも、今日この時をもって終わらせる…グランザム帝国軍の最大の切り札…フレームアームズ・ガール部隊によって。

兵士たちの誰もが、その決意を胸に秘めていた。

『誇り高きグランザム帝国軍の兵士たちよ！！総員私に傾注せよ！！私はグランザム帝国皇帝…ヴィクター・グランザムである！！』

帝国軍の兵士たちに、ヴィクターからの盛大な通信が届けられた。

兵士たちの誰もが真剣な表情で、ヴィクターの言葉に耳を傾けている。

『これまで我々は何度も城下町を攻め落とそうとしたが、あの忌々しいルクセリオ公国騎士団の連中に…特にあの英雄シオン・アルザードの前に何度も苦渋を舐めさせられた！！そして奴らの手によって数多くの同胞を殺された！！だがそれも今日この時をもって終わらせるのだ！！』

ヴィクターの言葉に熱が入る。兵士たちの士気が高まっていく。

『我々の最大の切り札、フレームアームズ・ガール部隊の力…それは先日のシオン・アルザードの敗北により実証済みだ！！彼女たちの力を奴らに思い知らせてやるのだ！！そして今度こそ奴らに辛酸を舐めさせてやるのだ！！』

うおおおおおおおおおおおおお！！

兵士たちの誰もが、盛大な歓喜の叫び声を上げる。

まるで自分たちの勝利を信じて疑わないとばかりに。

フレームアームズ・ガールたちさえいれば、自分たちは負けない・・・彼らはそう信じているのだ。

無理も無い。スティレット1人を相手に、あのシオンが撤退に追い込まれた・・・ごまかしようのない実例があるのだから。

「・・・私は・・・シオンさんに勝ってなんかいないのに・・・！！」

「言うな、リーズヴェルト少尉。これも兵たちの士気を高める為の皇帝陛下の演出だ。」

「ですが、大尉・・・！！」

「重ねて言うが、今のお前は我が国の救世主なのだ。お前がどれだけ否定しようともな。」

輸送艦の中でやり切れない表情をしているスティレットの右肩を、アーキテクトが励ますように軽く叩いた。

そんなスティレットの様子を轟雷と迅雷が、とても穏やかな笑顔で見つめている。

「ま、この戦いで真実にしちゃえばいいんだよ。私たちがシオン・アルザードを完膚なきまでに叩きのめしてさ。」

「そうそう。今回はステラ1人だけだったけど、今回は私とお姉ちゃんと、それに隊長も一緒なんだから。私たち4人で戦えば負けるはずがないよ。」

「・・・轟雷ちゃん・・・迅雷ちゃん・・・。」

「言っておくが敵はシオン・アルザード1人だけではないのだぞ？油断して足元を掬われないように気を付けろよ。」

アーキテクトがスティレットたちに呼びかけた所で、ヴィクターからの作戦開始の号令が下されたのだった。

『ルクセリオ公国城下町侵攻作戦・・・開始せよ！！』

ヴィクターからの号令と同時に、グランザム帝国軍が一斉に城下町へと侵攻を開始する。

左右から挟撃を仕掛けるように、同時に部隊を展開。一斉にミサイルが城下町へと放たれる。

それをルクセリオ公国騎士団たちが、城からの援護射撃を受けながら次々と撃墜していく。

だがスティレットたちフレームアームズ・ガールたちは、輸送艦から動かない。

切り札は最後の要所で、万全の状態ですべて投入する・・・それも定石の1つではあるのだが。

「遂に始まったな。作戦通り、私たちは陛下からの指示があるまで待機だ。」

「了解です。オラトリオ大尉。」

「もう10年か・・・こんな下らない戦争、いい加減早く終わらせたいたい物だな。」

決意を露わにするアーキテクトの言葉に、轟雷と迅雷が力強く頷く。

そしてスティレットは上空から戦闘状態の城下町周辺を、神妙な表情で見つめていた。

(シオン・アルザード中尉・・・またあの人と戦う事になるのかな・・・。)

何故なのだろう。シオンの事を考えると、スティレットは言いようのない懐かしさを感じていた。

シオンとは全く面識が無いはずなのに。あの時のオルテガ村での戦闘が初対面のはずなのに。

なのに…胸の内から込み上げて来る、この懐かしさと愛おしさは何なのだろうか。

(何でだろう…あの人は戦いたくない…だけど…あの人もう一度会いたい…。)

理由も分からないまま、ステイレットは悲しい想いで胸が締め付けられたのだった。

『進路クリアー。シオン隊、発進どうぞ！！』
「友と明日の為に！！シオン隊、出るぞ！！」
「「「「「「了解！！」」」」」」

そしてパワードスーツを身に着けたシオンたちは、ナナミからの合図と共に城からのリニアカタパルトによる射出を受け、一気に戦場を駆け抜けていく。

「ポイントLK37から迂回し、森の中から敵の側面に奇襲をかける。総員突撃！！」
「「「「「「了解！！」」」」」」

今回の防衛作戦でシオン隊に与えられた任務は、挟撃してきた敵の西側の戦力を排除する事だった。

正面から味方部隊と交戦しているグランザム帝国軍を、さらに側面から挟撃する形になる。シオンの目論見通り、側面からの奇襲で完全に虚を突かれたグランザム帝国軍は、あっという間に陣形を崩されていく。

そしてシオンが放ったビームマシンガンが、帝国軍の兵士たちの命を次々と奪っていった。少しでも苦しませないようにと、一撃で的確に脳天を打ち抜き、敵兵を即死させたシオン。

「はあああああああああああああああああつ！！」

そのシオンを背後から狙おうとしたモビルアーマーのコクピットを、マチルダのビームサーベルが的確に貫いた。

ビクンビクンと機体を震わせた後、動かなくなってしまったモビルアーマー。さらにマチルダを狙った帝国軍の兵士たちを、オスカルたちがビームマシンガンで迎撃する。あっという間に、戦場に死体の山が転がっていった。

「引け！！引けえー————っ！！総員撤退せよ————っ！！」

完全に側面から虚を突かれた帝国軍は形勢不利となり、敵部隊の指揮官の撤退命令を受け、あっという間に後退していった。

そして東側の帝国軍の部隊も、ルクセリオ公国騎士団のパワードスーツ部隊の圧倒的な活躍により、瞬く間に撤退へと追い込まれている。

その様子を城の指令室の中で、大臣たちが高笑いしながら見つめていたのだった。

「ふははははははは！！見たか帝国軍め！！これが我々の誇るパワードスーツの圧倒的な性能よ！！総員そのまま敵を追撃、奴らを完全に蹴散らすのだあつ！！」

大臣からの命令をオペレーターを通じて伝えられたルクセリオ公国騎士団たちは、撤退する帝国軍をさらに追撃していったのだが…。

「…おかしい。あまりにもあっさりと敵が引き過ぎだ。」

シオンだけは大臣の命令を無視し、厳しい表情で撤退する帝国軍を見つめていたのだった。その様子をマチルダが、心配そうな表情で見つめている。

「シオン隊長、どうなされたのですか？ 命令は敵軍の追撃では？」

「いや、この状況・・・何かが変だ。」

「変・・・？しかし戦況は完全に我が軍の優勢では？」

「これだけ完全に押し込まれているのに、未だにフレームアームズ・ガール部隊を出さないのはどういう事だ・・・？」

先日のオルテガ村での戦闘において、その実用性は完全に実証済みのはずだ。

だからこそグランザム帝国軍は、こうして城下町への侵攻作戦を決行したのではなかったのか。

にも関わらず、こんなにもあっさり撤退していく・・・フレームアームズ・ガール部隊に何かトラブルでも発生し、勝ち目が薄いと判断して慌てて撤退したとでも言うのか。いや、それは幾ら何でも希望的観測過ぎる。

「・・・ナナミ。現在の戦況マップを、僕の端末に送ってくれ。」

『了解しました。』

ナナミからの通信により、シオンの端末に戦場の全体図が送られてきた。

現在戦場となっている城下町周辺の地図に、赤印で示された敵軍と、青印で示された味方部隊の位置が詳細に映し出されている。

マチルダが言うように、戦況は完全にルクセリオ公国騎士団の圧倒的優勢・・・挟撃を仕掛けようとしたグランザム帝国軍を、逆にルクセリオ公国騎士団が完全に押し返す形になっていたのだが。

「・・・陛下、上申します！！」

『どうした？シオン。』

「これは罠です！！追撃に出した主力部隊をすぐに呼び戻して下さい！！」

ジークハルトは表情を崩さずにシオンからの通信を黙って聞いていたのだが、大臣たちは一転して怒りの形相でシオンを怒鳴り散らしたのだった。

「貴様あ、臆病風にでも吹かれたのか！？我々が貴様らに下した命令は追撃だろうが！！」

『それが罠だと言っているのです！！幾ら何でも敵があっさり引き過ぎている！！』

「それだけ我が軍の力が圧倒的だという事だろうが！！少しは頭を使え頭を！！状況を見て判断せんか！！この孤児風情が！！」

『ですから状況を見た上で僕は後退を進言しているのです！！この状況で例のフレームアームズ・ガール部隊が未だに出ないのはおかしい！！』

「陽動だとも言いたいのか！？だがレーダーにはそれらしき反応は何も無いだろうが！！」

確かに、レーダーには何の反応も無い。シオンの端末に送られた戦況マップに映っているのも、挟撃に失敗して無様に撤退するグランザム帝国軍の反応だけだ。

だからこそ大臣たちは、シオンが臆病風に吹かれたのだと罵声を浴びせているのだが・・・それでもシオンは罠だと確信を持っているのだ。

『彼女たちが何らかのステルス機能を使っている可能性もあります！！』

「言い訳など聞きたく無いわ！！いいからさっさと敵を追撃せんか！！これは命令だ！！逆らえば貴様を抗命罪で投獄するぞ！！いいな！？」

それでも罵声を浴びせる大臣たちに、シオンは厳しい表情を見せたのだが……。

「……まさか、こうもあっさり陽動に引っかかるとはな。だがそれならそれで好都合だ。」
『進路クリアー。フレームアームズ・ガール部隊、発進どうぞ！！』
「これより城下町へと奇襲をかける！！オラトリオ隊、出るぞ！！」
「「「イエス！！ママ！！」」」

そんなシオンの懸念通り、輸送艦からリニアカタパルトで戦場に射出されたアーキテクトたちが、あっという間に城下町のすぐ近くに着地したのだった。

撤退する帝国軍をルクセリオ公国騎士団の主力部隊が追撃に出ている現状では、完全に城下町の守りが手薄になっている状況だ。

「総員バックウォーム解除！！一気に城下町を抜け城の指令室を占拠する！！」
「「「イエス！！ママ！！」」」
「私と迅雷少尉で道を切り開く！！轟雷少尉とリーズヴェルト少尉は我々の援護だ！！」

アーキテクトたちが身に纏っていた黒色のマントを脱ぎ捨てた途端、先程までレーダーに映っていなかった彼女たちの反応が、突然レーダーに反応した。

まさかの事態に、大臣たちは戸惑いを隠せない。

「正門前方に敵の反応あり！！こちらに急速接近しています！！」
「な……何だとおっ！？」
「ライブラリー照合……スティレット・リーズヴェルト少尉、他3名！！例のフレームアームズ・ガール部隊と推測されます！！」
「馬鹿な！？索敵班は何をやっていたのだ！？何故レーダーに反応しなかったのだ！？」
「恐らく何らかのステルス機能を使っていた物だと思われます！！」
「ス、ステルス……！？おのれ、小癩な奴らめえっ！！」

先程までの余裕の態度から一転し、動揺を隠せずに騒ぎ立てる大臣たちだったのだが。僅かに残っていた防衛部隊も、アーキテクトたちの活躍で瞬く間に撃破されていった。騎士団の兵士たちが放つビームマシンガン、先陣を切るアーキテクトが両腕に装備した巨大なインパクトナックルで容易く無力化していく。

「貴様ら雑魚共に用は無い！！死にたくなければそこをどけえっ！！」
「「「「「ごえっ！！」」」」」

アーキテクトの巨大なインパクトナックルで殴られた騎士団の兵士たちは、まるでボロ雑巾のように無様に吹っ飛ばされて絶命したのだった。

そして迅雷が自分の身長よりも長い槍を巧みに振り回し、騎士団の兵士たちを次々と切り裂いていく。

そんな2人を轟雷が背後からプラズマキャノンで援護。直撃を受けた騎士団の兵士たちが黒焦げになっていく。

肉を斬る感触……肉が焼け焦げる感触……そして敵を殺す感触、血の匂い……轟雷も迅雷も故郷のチャイナ王国で生き残る為に、もう嫌という程味わってきた感触だ。

2人はもう人殺しに完全に慣れてしまったのだが……心優しい少女であるスティレットにまで人殺

しに慣れさせてはいけない。だから人を殺せないスティレットの代わりに、自分たちが敵を殺して戦争を終わらせるのだと…轟雷も迅雷もその決意を顕わにしていた。

「あのさあ、私もお姉ちゃんも隊長も、ステラと違って優しくないからさ。」

「ひ、ひいっ!？」

「…邪魔するっていうなら…容赦なく殺すよ？」

パワードスーツを身に着けた騎士団の兵士が、迅雷の斬撃を辛うじてビームサーベルで受け止めたのだが…迅雷の鋭い眼光と静かな気迫に、完全に気圧されてしまっていたのだ。

目の前に転がっている死体の山を見せつけられた騎士団の兵士はすっかり怯えてしまい、思わず迅雷に言われた通り撤退しようとしたのだが。

「馬鹿者!!何を怯んでおる!?撃て撃て!!敵を撃てえーーーーっ!!」

「く…くそが!!くそが!!くそがあっ!!」

隊長の命令には逆らえず、仕方無く迅雷を弾き飛ばしてビームマシンガンの銃口を迅雷に向けた騎士団の兵士だったが、無数の閃光が走ったと思った瞬間、そのビームマシンガンがあつという間にバラバラになってしまった。

啞然とする騎士団の兵士だったが…いつの間にか騎士団の兵士の隣にいたスティレットが、ビームサーベルでビームマシンガンを切り裂いていたのだ。

「は?…はあああああああああああ!？」

「ナイス、ステラ!!やるじゃん!!」

「…迅雷ちゃんが言っていたでしょう?死にたくなければ早くこの場を離れて下さい。」

自分を助けたスティレットに、笑顔で親指を立てる迅雷。

スティレットを追撃しようとした騎士団の兵士たちだったが、スティレットのあまりの動きの速さにロックオンすらままならず、次々とスティレットのビームサーベルの斬撃を受け…無数の閃光が走ったと同時にビームマシンガンをバラバラにされてしまう。

その様子をモニター越しにまざまざと見せつけられた大臣たちが、あまりの出来事に完全に腰を抜かしてしまったのだ。

「…ば…馬鹿な…主力部隊が不在とはいえ、パワードスーツを身に纏った兵士が10人もいたのだぞ…!?それが、たった1分で…こんな…!?」

「畏、陽動、ステルス…そしてフレームアームズ・ガール共の奇襲か…全てシオンが懸念した通りの結果になったようだな。」

対照的にジークハルトは表情を崩さず、威風堂々と腕組みをしながら戦況を見つめ続けている。

国王である自分が狼狽えてしまえば、兵士や民の士気にも影響するというのもあるが…何よりもジークハルトは信じているのだ。

シオンならばこの状況を、必ず何とかしてくれると。

「つ、追撃に出した主力部隊はまだ戻らんのか!?シオン隊は何をやっておるのだ!?早く奴ら呼び戻すのだ!!」

「先程まで追撃中止を進言したシオンに、抗命罪だとか抜かしていたのはお前だろうが。」

「今はそれ所ではありませんぞ陛下!!とにかく今はこの状況を何とかしなければ!!」

「フン…現金な奴らだ。」

「何をそんなに余裕ぶっておられるのですか陛下！？敵がすぐそこまで迫っているのですぞ！？ここは敵に対しての降伏も視野に入れるべきでは！？」

「慌てるな阿呆共が。それが人の上に立つ者が部下たち見せる態度か。」

ジークハルトは腕組みを崩さずに、何の迷いもない力強い瞳で、威風堂々とはっきりと告げた。

「…シオンなら、もうすぐそこまで来ている。」

アーキテクトがインパクトナックルで戦車を吹っ飛ばし、その吹っ飛ばされた戦車に巻き込まれた騎士団の兵士たちが次々と圧死していく。

そんな中でステイレットが敵の武器だけを無力化し、命を奪わずにいる光景を、厳しい表情で見つめていたのだが。

「リーズヴェルト少尉！！そういう戦い方は自重しろと言ったはずだぞ！？」

『オラトリオ大尉、城からのミサイルによる砲撃が来ます！！』

「総員散開！！」

「「「イエス！！マム！！」」」

オペレーターからの指示を受けたアーキテクトたちは四方に散開し、ミサイルによる砲撃を的確に避けていく。

だがその瞬間を狙っていたシオン隊が、一斉にアーキテクトたちに突撃したのだった。

「よし、僕の狙い通り彼女たちは孤立した！！作戦通り各個迎撃するぞ！！ただし無理に撃破に拘る必要は無い！！僕がああの指揮官を倒すまで足止めしてくれればそれでいい！！」

「「「「「「了解！！」」」」」」」

「いいか！？彼女たちの強さは見ての通りだ！！絶対に1対1で戦うなよ！！数的有利を活かし常にチームで連携して行動するんだ！！総員散開！！」

シオンの指示でマチルダたちは3つのチームに分かれて散開。

マチルダら3人はステイレットを、オスカルら3人は迅雷を、リックともう1人が轟雷を、それぞれ迎撃に向かう。

そしてシオンはたった1人で、ビームサーベルを手にアーキテクトに斬りかかった。

アーキテクトは右手のインパクトナックルで、易々とシオンの斬撃を受け止める。

「僕はルクセリオ公国騎士団シオン隊隊長、シオン・アルザード中尉だ！！」

「お前が噂の英雄殿か！？私はグランザム帝国軍フレームアームズ・ガール部隊隊長、アーキテクト・オラトリオ大尉だ！！」

「ここから先は通さないぞ！！」

「この私とタイマン勝負を望むか！！面白い！！受けて立ってやる！！」

アーキテクトの左腕のインパクトナックルによる攻撃を、シオンはバックステップして避けて体勢を立て直した。

そして何の迷いも無い力強い瞳で、シオンはアーキテクトを見据える。

そのシオンの瞳を見たアーキテクトはシオンを強敵と認め、気持ちを高ぶらせたのだった。

「ルクセリオの英雄とやらの実力…この私に見せてみる！！」

5. 死闘…シオンVSアーキテクト

「貴方は、あの時の…！？くっ…！！」

「貴方をシオン隊長の元には、絶対に行かせないわよ！！」

マチルダたちのビームマシンガンがスティレットを狙うが、それでも高速で動き回るスティレットを前に、ロックオンすらままならない状況だ。

何とかマチルダたちを振りほどこうとするスティレットだったが、それでもマチルダたちの連携の前に中々思うように行かない。

マチルダとスティレットのビームサーベルがぶつかり合い、互いに鏝迫り合いの状態になる。

「…やっぱりこの人たちは、他の人たちよりも桁違いに強い…だけど！！」

「あの時のような失態は、もう絶対にしないわよ！！リーズヴェルト少尉！！」

「だけど私だって、負けるわけにはいかないの…！！」

そしてオスカルと迅雷が派手にビームサーベルと槍をぶつけ合うが、迅雷の圧倒的な強さの前にオスカルは完全に押され気味だ。

2人のシオン隊のメンバーがビームマシンガンでオスカルを必死に援護するが、3人がかりでさえも迅雷の足止めで精一杯だった。

完全に息を切らしているオスカルたちとは対照的に、迅雷はまだまだ余裕の表情だ。

それはオスカルたちと迅雷の、ごまかしようのない実力差…そしてパワードスーツとフレームアームの性能差の証だ。

「くそが、たかが女1人を相手に、3人がかりでこの様とはよお…！！」

「あんたたち、やっぱり他の雑魚共とは違うみたいだね。さすがは精鋭を誇るシオン隊だよ。」

「けどよ、シオン隊をシオン隊長だけのチームだと思うなよ！？」

「どうやら狙いは私たちの足止めみたいだけど…ちょっと隊長を舐め過ぎなんじゃないの？」

「ふざけんな！！お前らだってシオン隊長を甘く見てんじゃねえぞコラあっ！！」

そのすぐ傍らで、リックたちと轟雷が派手な銃撃戦を繰り広げていた。

何とか接近戦に持ち込みたいリックだったが、轟雷が放つ無数の弾幕、そして的確な射撃精度の前に、中々その糸口を掴めない状況だ。

轟雷のプラズマキャノンでリックは辛うじて避け続けるが…果たしてそれがいつまで持つのか。

「シオン隊長の読み通り、こいつのフレームアームは射撃戦に特化した性能のようだが…だからといってこれは特化し過ぎだろ…！！あの大型のプラズマキャノンをここまでの精度で当てて来るとは…！！」

「接近戦に持ち込めば勝てると思った？確かに私はステラや迅雷と違って接近戦は苦手だけさ…だったら接近戦をさせなければいいじゃない。」

「だが俺たちがここでお前を足止めしていれば…シオン隊長が必ず何とかしてくれる！！」

そのリックの期待を受けながら、シオンはアーキテクトと死闘を繰り広げていた。

アーキテクトが放つインパクトナックルによる一撃を的確に避けながら、ビームマシンガンでアーキテクトを狙い打つが…インパクトナックルで防がれて傷1つ追わせられない。

「やはり僕の読み通りか・・・貴方のそのフレームアームは、単純に攻撃力と防御力のみを特化させた性能のようだな。」

「そうだ。シンプル故に強力・・・それに私は細かい事をいちいち気にしないタイプでな！！」

「生半端な攻撃は通用しないか・・・だが！！」

懐からビームサーベルを取り出したシオンは、正面からアーキテクトに斬りかかる。

そしてアーキテクトのインパクトナックルによる強烈な反撃を、シオンはビームサーベルで的確に受け流し、一気に懐に飛び込む。

その流水のような流れる動きに、アーキテクトは思わず体勢を崩したのだが。

「当たらなければどうという事は無い！！」

「ふっ・・・かかったな。アルザード中尉。」

「な・・・！？」

懐に飛び込んだシオンを狙いすましたかのように、アーキテクトの右足に仕込まれた小型のビームショートライフルがシオンに狙いを付けていた。

「隠し武器か！？」

「懐に飛び込めば勝てるとも思ったか！？甘いな！！」

慌ててビームシールドでビームを防ぐシオンだったが、そこへ狙いすましたかのようにアーキテクトのインパクトナックルが襲い掛かった。

何とかビームシールドで受け止めたシオンだったが、あまりの威力にシオンの身体が城壁に叩き付けられる。

よろめきながらも何とか立ち上がるシオンだったが、その凄まじい衝撃によって身体にダメージを受けてしまったようだ。

「くっ・・・分かってはいたが・・・全くとんでもない威力だな。」

「ほう、自ら後ろに飛ぶ事でダメージを最小限に抑えたか。やはりお前は先程までの雑魚共とは違うようだ。だが・・・」

「・・・ナナミ、今だ！！」

シオンの合図により、アーキテクトの足元の地面が突然爆発した。

いきなりの出来事に、周囲で戦っていたステイレットたちは啞然とした表情になる。

遠隔操作タイプの地雷による爆撃・・・シオンは初めからこれを狙っていたのだが。

「・・・だが自分の事を『僕』などと呼ぶ男は、総じて軟弱者だと相場は決まっている！！」

その地雷さえも威風堂々と踏み続け、アーキテクトはゆっくりとシオンの元に歩み寄っていった。

立て続けに起こる爆発に隠れてよく見えないが、アーキテクトが全くの無傷だという事は間違いなさそうだ。

その様子をオスカルは、迅雷と鏑迫り合いをしながら驚愕の表情で見つめていた。

「ば、化け物かよ、あの女！？何で地雷を踏み続けて無傷なんだよ！？」

「だから言ったじゃん。私らの隊長を甘く見過ぎだって。」

「畜生、僕を信じろって俺らに言ってたじゃないですか！！シオン隊長！！」

「何だ今のは！？一体何があったというのだ！？」

吹き飛ばされた爆風の向こう側・・・アーキテクトが目撃したその光景は・・・大型の銃を肩に担いで自分に狙いを付けているシオンの姿だった。

「レールガン(陽電磁砲)だとおっ！？馬鹿な！？奴は軽装タイプの武装しか持っていなかったはずだ！？なのに一体どこからあんな物を・・・っ！？」

言いかけたアーキテクトは、シオンの考えを瞬時に理解したのだった。

アーキテクトの視界に映る、優雅にそびえ立つルクセリオ城・・・そこからシオンたちが出撃したとなれば、当然そこから武器を供給する事も可能・・・つまりシオンは・・・。

「まさかお前は・・・レールガンを城からのリニアカタパルトで飛ばしたとでも言うのか！？私を地雷源におびき寄せたのも、装備を換装する為の時間稼ぎの為だったと！？」

「その通りだ。だが今更気付いた所でもう遅い！！」

もし、スティレットが警告してくれなかったら・・・アーキテクトの身体が一瞬止まらなければ・・・今頃アーキテクトは陽電磁砲の直撃を受け、決して無事では済まなかっただろう。

いかに最強の防御力を誇るアーキテクトのフレームアームといえども、陽電磁砲の直撃を受けてしまえば決して無傷ではいられない。

続けて放たれた強烈な光を、アーキテクトは辛うじて左腕のインパクトナックルで受け止めた。

そのインパクトナックルが陽電磁砲のあまりの威力の前に、無様に粉々に粉砕されてしまう。

「ぬうううううううううううううううううううううううっ！！」

大型の陽電磁砲を、轟雷顔負けの精密射撃で的確に当てて来るシオン。

こいつは何と言う男なのだ・・・！？アーキテクトの脳裏に明確な『死』のビジョンが映し出されたのだった。

油断・・・いや、仮にも英雄と呼ばれているシオンを相手にしたのだ。それにアーキテクトはシオンを強敵と認め、敬意をもって戦いに臨んでいた。そんな事は絶対に無い。

(・・・私は今まで、このフレームアームの性能に頼り過ぎていたとでも言うのか・・・！？その隙をアルザード中尉に見事に突かれたと・・・！？)

陽電磁砲の銃口をアーキテクトに向けるシオン。

両腕のインパクトナックルは粉々に粉砕された。それに先程の一撃で体勢を崩してしまったアーキテクトには、次の一撃をまともに回避するだけの余裕がない。

修羅場を何度も潜り抜けてきたアーキテクトだからこそ、はっきりと分かる。

私はここで死ぬ・・・と。

「これで終わりだ！！オラトリオ大尉！！」

「ちいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいっ！！」

シオンがアーキテクトに陽電磁砲を放とうとした、その瞬間。

『避けて下さい隊長—————っ！！』

「・・・っ！？」

マチルダからの通信を受けたシオンに、ステイレットのビームガトリングガンが襲い掛かった。とっさに陽電磁砲を盾代わりにして攻撃を防いだシオンは、慌てて被弾した陽電磁砲をステイレットに投げつける。

それをビームサーベルで真っ二つにするステイレット。

真っ二つにされた陽電磁砲が、派手な爆発音を立てながら粉々に粉碎されたのだった。

「ナナミ！！機動ウイング射出！！」

『は、はい！！』

シオンは上空に飛び、リニアカタパルトで飛んできた翼を空中で背中にドッキングさせた。そして懐のビームサーベルを取り出し、自分を追いかけてきたステイレットを見据える。

『シオン隊長、申し訳ありません！！彼女を抑え切れませんでした！！』

「いや、問題ない。よくやってくれた！！」

マチルダの通信を受けたシオンに、ステイレットのビームサーベルが襲い掛かる。

「シオン・アルザード中尉・・・！！」

「ステイレット・リーズヴェルト少尉か！！」

それをビームサーベルで受け止めたシオンは、ステイレットと鏝迫り合いの状態になり、互いに上空で見つめ合う形になったのだった。

6. 戦場のステラ

既に日が沈みかけている、綺麗な夕暮れの優しい光に包まれながら、シオンとステイレットは上空で壮絶な死闘を繰り返していた。

ステイレットの機動力に対抗する為に機動ウイングを装備したシオンだったが、それでも機動性に関してはステイレットの方が上ようだ。

だがそれでもシオンは長年の経験と技術を駆使し、何とかステイレットと互角に渡り合っていた。

互いのビームマシンガンとビームガトリングガンが乱れ舞い、ビームサーベルが何度もぶつかり合い、2人の周囲に無数の閃光が走る。

その凄まじくも美しい戦いぶりにアーキテクトたちもオスカルたちも、指令室にいるジークハルトやナナミたちも、遠く離れたグランザム帝国から戦況を見つめているヴィクターでさえも、戦いを忘れて思わず魅入ってしまった。

ただ1人・・・必死にシオンの元に向かっているマチルダを除いて。

斬りかかってきたシオンの右腕を左手で掴み、そのままシオンの斬撃の威力をも利用し、シオンを空中で投げ飛ばすステイレット。

体勢を崩したシオンにステイレットのビームガトリングガンが襲い掛かるが、それを読んでいたシオンは体勢を崩しながらもビームシールドで的確に受け止める。

なおもビームガトリングガンを撃ち続けるステイレットだったが、それでもシオンは機動ウイングのブースターをフル稼働し無理矢理方向転換。

ステイレットのロックオンを外したシオンは、ビームマシンガンを的確に当て、ステイレットのビーム

ガトリングガンで大破させた。

「まだまだあつ！！」

ビームガトリングガンを投げ捨てたスティレットはシオンの周囲を高速で飛び回り、シオンをロックオン出来ない状況へと追い込んでいく。

この高速飛行の前にマチルダたちは、まともにビームマシンガンを撃つ事さえも出来なかったのだが、それでもシオンはスティレットの動きを見事に読み切り、方向転換の為に一瞬止まったスティレットをロックオンする。

だがそれはスティレットが巧みに仕掛けた罠。わざと動きを止める事でシオンの意識を射撃に集中させ、その一瞬の隙を突いて隠し持っていたビームナイフを投げつけた。

慌ててそれを避けるシオンに、高速で迫るスティレットのビームサーベルが迫る。

射撃に意識を集中させていたシオンは反応が一瞬遅れ、ビームマシンガンを真っ二つにされてしまった。

「このおっ！！」

互いに射撃武器を失ったシオンとスティレットはビームサーベルを手に、上空で何度も何度も派手にぶつかり合う。

「シオンに城からの援護射撃をしてやる事は出来ないのか！？」

「2人の動きが速過ぎて、迂闊に撃てば隊長に当ててしまう恐れがあります！！」

ナナミからの警告に、ジークハルトは厳しい表情で歯軋りする。

こんな時に何もシオンに手助けをしてやれない現状に、やり切れない思いで一杯だった。

いつもそうだ。こんな時にジークハルトはシオンに何もしてやれない。シオン1人に戦いを押し付けてしまっている。

自分はこうして安全な場所で、命懸けで戦うシオンを見守る事しか出来ない・・・それが国王の役目とはいえ、ジークハルトにはそれが何よりも歯がゆかった。

「・・・シオンを信じてやる事しか出来ないという事か・・・！！」

何とかスティレットに追いついたマチルダだったのだが、2人の戦いがあまりにも壮絶過ぎて、付け入る隙すら見い出せないでいた。

いや、この状況では中途半端に助けに入った所で、かえってシオンの足手まといになってしまうだけだ。

それを悟ったマチルダは歯軋りしながら、2人の壮絶な戦いを見守り続けていたのだが。

「シオンさああああああああああああん！！」

「ステラあああああああああああああああつ！！」

まただ。またしてもシオンは、スティレットの事を無意識にステラと呼んでしまった。

だがそんな事を気にする余裕さえも無いまま、シオンはスティレットと、もうこれで何回目かという鏝迫り合いの状態になる。

互いに至近距離で見つめ合うシオンとスティレット。だが次の瞬間、シオンに凄まじい頭痛が襲い掛かった。

「…ぐうっ…！！」

そして表情を歪めたシオンの脳裏に浮かんだのは…炎に包まれる村の中で、怯えた表情で自分を見つめるステイレットの姿。

「…何なんだ…！？君は一体僕の何なんだ…！？」

訳が分からないといった表情で、必死に頭痛に耐えながらステイレットを見つめるシオン。
そしてステイレットもまたシオンと何度も剣を交える内に、以前から感じていたシオンに対しての懐かしさと愛おしさが、何故かどんどん膨らんでいくのを自覚していた。
何故なのだろう…もっとこの人に触れていたい…もっとこの人を感じていたい…。
もっと…もっと…もっと！！

鏢迫り合いの状態からステイレットに剣を受け流され、体勢を崩したシオン。
何とか体勢を立て直そうとするシオンだったが…そこへステイレットがいきなりシオンに抱き着いた。

「…は！？」

そして潤んだ瞳で、ステイレットはシオンと唇を重ねようとする。

「は！？あ！？え！？…はいはいはいはいはい(汗)！？」

訳が分からないといった表情で、どんどん近付いてくるステイレットの顔を見つめるシオン。

(え！？何この状況！？何で彼女は僕にキスしようとしてるの！？)
(ハニートラップか！？ハニートラップなのか！？いやでもこの状況で僕にハニートラップを仕掛ける意味は！？)
(まさか口移しで僕に毒を盛るつもりなのか！？でも今は戦闘中だぞ！？逆に彼女自身が誤って毒を飲み込む危険だってあるだろうに！！)

頭をフル回転させて必死に今の状況を把握しようとするシオンだったが、それでもステイレットは何故かとても嬉しそうな表情で、静かに目を閉じた。

「…シオンさん…。」

「え！？ちょっとマジか！？マジなのか！？ちょっと、リーズヴェルト少尉…んんっ！？」

ステイレットがシオンと唇を重ねた、その瞬間。
物凄い形相のマチルダが、ステイレットにビームマシンガンを浴びせたのだった。

「あんた、シオン隊長に何さらしとんじゃボケえ(激怒)！！」

「…っ！？」

慌ててシオンから離れてマチルダの射撃を避けたステイレットは、意味が分からないといった表情でシオンの事を見つめていた。

どうして私は、この人にこんな事を…！？急に恥ずかしくなってしまったのだが、それでも今はそんな事を気にしていただける状況ではない。

シオンの元から高速離脱し、ステイレットはアーキテクトの救援に向かった。

「オラトリオ大尉、戦況は既に私たちに不利です！！引き離れた敵の主力部隊も戻りつつあります！！ここは撤退しましょう！！」

「・・・ええい、お前がアルザード中尉の毒殺に失敗した以上、止むを得んか・・・！！」

「あ、あの・・・。」

「轟雷少尉！！信号弾を撃て！！作戦は失敗だ！！総員撤退する！！」

『イエス！！マム！！』

轟雷が放った信号弾が爆音と共に上空で派手に爆発し、それと同時にグランザム帝国軍は一斉に撤退したのだった。

その様子をルクセリオ公国騎士団の兵士たちが、勝利の雄叫びを上げながら見送っている。

アーキテクトに肩を貸しながら撤退するスティレットの後姿を、戸惑いの表情で見つめるシオン。

そしてスティレットとアーキテクトに合流した轟雷と迅雷は、訳が分からないといった表情でスティレットを見つめていたのだが。

「・・・ねえねえステラ。何でアルザード中尉いきなりキスしたの？」

「お前たちには話していなかったが、実はリーズヴェルト少尉はアルザード中尉に、口移しで毒を盛る計画を立てていたのだ。」

「え！？マジでマジで！？ステラってば意外と大胆！！」

「最もあの様子だと、どうやらアルザード中尉に感付かれたようだがな。」

騒ぎ立てる轟雷に反論しようとしたスティレットの口を、アーキテクトの左手が塞いだ。

そしてアーキテクトはスティレットにだけ聞こえるように、静かに耳元で呟く。

「・・・事情は敢えて問わん。だがここは私と口裏を合わせておけ・・・あの口煩い幹部連中に軍法会議にかけられたくなければな。」

「・・・むぐ、むぐ・・・むぐぐ。」

涙目で頷いたスティレットの口から左手を離れたアーキテクトは、自分が肩を借りているスティレットを神妙な表情で見つめていたのだった。

(アルザード中尉とリーズヴェルト少尉・・・何かあるのか・・・?)

そして何とか城下町を守り切ったシオンは、ビームサーベルを懐にしまい、ふうっ・・・と溜め息をついたのだが。

「・・・シオン隊長~~~~~(激怒)！？」

突然マチルダが物凄い形相で、シオンの事を睨み付けたのだった。

あまりの迫力に、シオンは思わずタジタジになってしまう。

「あ、あの・・・。」

「何でシオン隊長はあんなにも無防備に、あの子にキスなんかされちゃってるんですかああああああああああああ(激怒)！？」

「い、いや、その・・・僕にもよく分からないんだ・・・。」

「分からない~~~~~(激怒)！？」

シオンも自分が何を言っているのか、自分でもよく分かっていなかった。

抵抗しようと思えば出来たはずだ。なのに何故シオンは、ステイレットに簡単にキスを許してしまっただのか。

そしてステイレットからのキスを全然嫌だと思わなかった自分自身に、シオンは戸惑いを感じていたのだが。

「あの、て言うかマチルダ…一体何をそんなに怒ってるのかな…？」

「怒ってません(激怒)！！」

「いや、怒ってるよね…？」

「怒ってませんっ(激怒)！！」

すっかり怒ってしまったマチルダはシオンの右手を掴み、無理矢理城へと飛翔していく。

「あ、あの…。」

「こちらシオン隊所属、マチルダ・アレン上等兵！！アルザード中尉が敵軍の女兵士に、口移しで毒を盛られた可能性があります！！至急医療スタッフの手配を要求します！！」

「いや、僕は別に彼女に毒を盛られてなんか…。」

「念の為に検査します！！分かりましたね(激怒)！？」

「いや、でも…。」

「分！！か！！り！！ま！！し！！た！！ねっ(激怒)！？」

「はい…。」

すっかりマチルダに怒鳴られっぱなしのシオンのへたれぶりを、ジークハルトが溜め息をつきながら見つめていたのだった…。